

聾 幼 児 の 教 育

〈指導の原理〉

(一)



聾児は先ず第一に子どもとして、そして第二に聾児として考えられなければならない。

そして聾児も先ず子どもであるという立場に立つて考えるなら、我々は常に正常な聴児の楽しむ正常な活動や経験および幸いな環境を聾幼児にも与えなければならない。

我々は、聾幼児の身体的、精神的、情緒的要求を調和あるものとし、常に聾幼児を「全体としての子ども」としての立場から眺め、彼らの精神的、身体的発達を企図しなければならない。

家庭および学校において、彼らに与えられる身体的、情緒的環境が、これらの要求を満たすように配慮されなければならない。

したがって、聾幼児教育の指導内容も、普通児の指導内容と、基本的に変わるものではなく、ことばの指導はいうまでもないが、創

造的活動も遊びも自然の観察も基本的な生活習慣も、さらに音楽さえも、指導されるのである。

教育施設においても、普通児の幼稚園に必要なものは、聾幼児の幼稚園にもすべて必要である。

次に聾児としての立場に立つて考えるなら、親や教師は、聾児のニードに応じて、意図的に計画された方法によって子どもを指導しなければならない。

子どもが習得しなければならない特別の技術が子どもの毎日の経験の中にとけ込んで指導されるようにしなければならない。

指導内容においても、普通児の指導内容のみならず、聾幼児のニードに応じた 感覚訓練、読話、発語、聴能訓練、律唱（音楽）指導などの特別の内容が準備されなければならない。

このことは、聾幼児の教育施設においても同じである。

普通児の幼稚園の施設以上に豊かで変化のある広い施設が望ましばかりでなく、教室、食堂、寝室、便所、ロッカー、階段、手洗

松 沢 豪

場、足洗場など、無言語の聾幼児に対して、親切によく設計される必要がある。

しかもその上に、個人指導室、聴力測定室、聴能教育施設などの特別の施設を必要とするのである。

聾幼児の教育は、常にこれら二つの原理を考慮しておこなうべきである。

(一)

ところで、聾児も先ず子どもである、という立場は、おうおう、聾幼児の幼稚園における指導を普通児と同じようにしなければならぬ、という主張を生ずる。

教具がよく準備され、環境がよく整えられた場において、普通児と同じような方法で聾幼児を取り扱い、教師も普通児の保母に指導に当らせ、言語指導なども、何ら特別の指導をおこなわず、自然に遇発的に教えられるべきであるとする。

これは従来の聾教育が、聾児の聴覚障害という現象のみに心を奪われ、したがって聴覚障害から惹き起こされた言語障害の余りの重大さと指導の困難さに他を顧みる余裕もなく聾教育を近視眼的な徹視的な見方しか出来ず、聾教育はそのまま言語指導であり、しかもその言語指導が、読語と発語の指導に限られるという現象に対する反省であったのである。

なるほど、全体としての子ども、の発達を考慮しない、制限された訓練は、教育の失敗を結果する。

しかしながら、何ら特別の教育内容や方法を用いない聾教育も聾教育の本質を知らない一面的な見方で、決して聾児のよき発達を促がすものではない。

聾の問題や子どもの発達の原則に通じている教師にとっては、子どもの内的成熟と、特別の訓練とを結合することは、全く可能である。そして特別な訓練は子どもの内的成熟に即して育成され、子どもの必要とする特別の技術が、子どもの毎日の経験の中にとけ込んで指導され得るのである。

私は以上のような考え方のもとに、聾教育の中心問題である聾幼児の言語指導の在り方を次に述べてよう。

△言語指導▽

(一)

子どもとしての正常な経験が、教育の土台になるならば、聾児の言語指導も、聾児の毎日の正常な経験の中に融け込んでおこなわれなければならない。

子どもは家庭において毎日、就寝、起床、洗面、食事、入浴、外出、遊びなどさまざまな経験を繰り返している。

また幼稚園では、遊び、手技、自然の観察、音楽、食事、はばかり、おひるねなど、さまざまな日課を繰り返している。

聾児の言語指導は、こうしたさまざまな経験の中で、自然に偶発的に生起する場面を捉えてその時その場に必要な、子どもの心にび

ったり合ったことばを指導するのである。

そしてこうしたことばの指導は、子どもの行動を制約するものではなく、かえってこれを奨励し、勇気づけるものでなくてはならない。

教育とは生活指導であるとするなら、家庭における子どもの生活経験を通して生活のルールを身につかせ、望ましき生活習慣をつけることや、感情や情緒の調和ある発達によるパーソナリティーの成長を企てる、などの教育がおこなわれるであろう。

また幼稚園の教育においては、遊びや手技や自然の観察や音楽の指導など、それぞれ本来の目的を持っている。

しかし聾児にとってはこれらすべての生活が、同時に、言語によって通されることが必要である。

これらすべての生活が、言語との関連において考えられ、理解され、用いられることが必要である。

以上のように、子どもの毎日の生活の中において、自然に偶発的に生起する場面を捉えておこなう言語指導の方法を、私は、「一般的方法」と呼んでいる。

(二)

言語指導において、聾幼児のニードは一般的方法による指導だけでじゅうぶんであろうか。

二、三才のまだ物に名前のあることさえ知らない聾幼児が、話し

手の口の形に意味を読み取るとか、我々と同じように発音器官を使って発音するとかいう特別の技術の習得が、自然に生起する日常生活場面だけの指導でじゅうぶんであり得ようはずはない。

聾児が幼なければ幼ない程、言語指導に特別の内容や指導の方法が取られなければ、彼らの言語発達に期待を持つことは困難である。したがって、聾幼児の言語指導においては、言語の系統を意図的に、段階を追って一步一步追求する。特別の方法——私はこのような方法を一般的方法に対して「特殊的方法」と呼んでいる——を取る必要がある。

私は聾幼児の言語指導の領域を次の如く定めて、それぞれの内容をグレイド別に配列し、特別の指導をしている。特別の指導というのは、言語指導の教具や施設の揃えられた個人指導室において、聾幼児をひとりずつ連れてきて、一対一の個人指導をおこなっているということである。

1、言語：語イ、文型、語法を含めた言語指導の体系

2、感覚訓練：言語への跳躍板としての目的を持っておこなわれる。中心的な内容は、視覚と触覚の修練を目的としたものである。

3、読語：口の形の動きを契機にして、話し手のことばを視覚を通して読みとることで、言語受容における中心的入口である。中心的な指導内容は、言語、視覚の識別力、類推機能などである。

4、発話：よく話すことと、明瞭に話すことの二つを指導内容とする

る。

5、聴能訓練：広義に解すれば、環境に生ずる音への適応を全体としての子どもの発達の中に具現することであるが、言語指導の領域における聴能訓練は聴能を訓練しかつ聴能の協力のもとにおこなわれる言語指導の一切である。補聴器の使用法ももちろん、ここの指導内容である。

6、読み：書かれた文字を見て、その内容を理解すること。黙読であれ音読であれ、内容理解を目的としたもの。私共の幼稚園では、ローマ字を使用している。

聾幼児の言語指導では、このような領域にわたって、それぞれの指導内容を「一般的方法」と「特殊的方法」で指導されなければならないのであるが、特殊的方法は一般的方法の中に入り込むし、一般的方法も特殊的方法の中に入り込んで、両者は絶えず交渉している。そして聾幼児の言語指導は、これら二つの方法が、両々相まって発達するのである。

む す び

我が国に聾教育が始められてから八十年になり、昭和二十四年には、満六才からの就学の義務制も敷かれたが、聾幼児の教育は、私共の日本聾話学校で正式の教育を始めて僅かに十年であり、現在全国でも三、四の聾学校がおこなっている位の黎明期にある。

聾教育における不変の中心的な問題を挙げるなら、それは言語指

導と職業教育である。そしてそれらのいずれも、聾幼児教育を抜きにしては根本的解決はあり得ないのである。さらにいうなら、聾教育のあらゆる問題の根本的解決が聾幼児教育につながっており極論すれば聾幼児教育特に聾幼児教育における言語指導の成否に関係していると考えられるのである。

私は我が国における聾幼児教育が一日も早く制度化されて、全国すべての聾話学校でひとりでも多くの聾幼児が教育を受けることの出来るようにまたその日の為に多くの先輩同僚学友たちの御指導を得て、確たる聾幼児教育の建設に努めたいと念願する次第である。

一九五九年十二月二三日記

追記

(一) この小論を書くに当って、主として参考にした文献は次のものです。

1. A New approach to the Education of two and three year old deaf children. By members of the staff of Ft. H. S. 47 the Volta Review May, 1949. この聾学校は「ニューヨークにあるアメリカの代表的聾学校の一つです。」
2. "Nursery and Preschool"
A Summer Meeting Panel Discussion, June 18, 1952; Nov. 1952. The volta Review.
3. Language for the Pre-school Deaf Child, by Grace Harris Lasseman.

(二) 聾幼児の言語指導の具体的方法は次の本にあります。

1. Language for the Pre-school Deaf Child, by Grace Harris Lasseman.
2. Opportunity and the Deaf Child, by Euing.
なおこの本の訳は上野節夫さんが「特殊教育」にのせています。
3. 言語指導における一般的方法と特殊的方法 松沢 豪 特殊教育誌二五、二六号
4. ろう児の幼児期における言語の入門指導 松沢 豪 初等教育資料二十一号

(三) 聾幼児教育の重要性については、特殊教育誌六十五号に私の書いたものがあります。

(日本聾話学校)